『アウシュヴィッツへの道』（春風社、2022-03 刊）――ロシアのウクライナ侵略戦争を考える比較素材として――

永岑三千輝（市大名誉教授）

はじめに

私の研究の一つの柱がナチス・ドイツ・第三帝国のソ連征服戦争とユダヤ人迫害・大量殺戮の歴史です。今回、横浜市立大学新叢書の一冊として学生・院生だけでなく、高校生や一般社会人にも広く読んでもらえることを期待して、ホロコースト（ユダヤ人大量殺戮）に関する基本的な問い――なぜ、いつから、どこで、どのように――に答えるというスタンスでまとめました。

１．　なぜホロコーストを研究してきたのか

(1)　「ナチ・ガス室はなかった」――『マルコポーロ』事件

ユダヤ人大量殺戮研究のきっかけは、一九九五年一月の『マルコポーロ』事件でした。神戸大震災とオーム真理教事件で日本中が騒然とていた当時、第二次大戦終結・アウシュヴィッツ解放の五〇周年記念の年にすべき時にこの事件は発生しました。文芸春秋社の座雑誌『マルコポーロ』（二月号）に「ナチ・ガス室はなかった」と称するセンセーショナルな「論文」が掲載されました。アウシュヴィッツ否定論、ホロコースト否定論の日本での公然たる登場でした。否定論は欧米では戦後ずっと現在まで、本物のナチ、ネオナチ、人種主義者などが密かに、あるいは公然と垂れ流してきたものです。アメリカをはじめとする欧米で「歴史修正主義」を名乗る極右の「学術雑誌」の抜粋、その受け売りが雑誌に掲載されたのでした。国内外から厳しい批判を受け文芸春秋社はただちに廃刊。しかし、否定論に対する欧米の歴史科学の到達点はどこにあるのか、これが日本の歴史学界に、その一人である私に突きつけられました。

(2) 欧米とわが国での歴学上の論争――ヒトラー命令・大々的絶滅政策の画期をめぐって

歴史学上では、ユダヤ人大量殺戮（絶滅政策）がいつ始まったのか、ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅命令は一九三九年一月か、四一年夏なのか十二月なのかをめぐって世界的な歴史科学論争がありました。論争点はヨーロッパ・ユダヤ人の大々的絶滅政策への移行がいつからなのか、ヒトラーやナチス首脳のどのような発言・演説・実際の行動からなのかでした。

拙著『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆　一九四一‐一九四二』（同文舘、一九九四）と『独ソ戦とホロコースト』は四一年一二月説。これは、今回の拙著でも確認できた世界の歴史学の到達点です。

ユダヤ人への迫害（差別や追放・強制移住）から大量殺戮への過程は段階的に進行。はじめに殺戮のヒトラーの絶滅プログラムがあったのではなく、ヒトラー・ナチス、ドイツ第三

帝国の膨張から戦争への過程で過激化が進展。電撃戦・ヨーロッパ戦争から総力戦・世界戦争へと泥沼化し、第三帝国が全面的に敗退して、追い込まれていく過程で、ヨーロッパ・ユダヤ人の殺戮が累進的に過激化した、と。

今回の拙著は、第一次世界大戦からワイマール期の概観を踏まえ、ヒトラー・ナチ体制が敗北の絶望的状態に追い込まれていく諸段階、そこでの累進的過激化過程に的を絞ってまとめたものです。

２．ヒトラー第三帝国の侵略戦争とプーチン・ロシア大国のウクライナ侵略戦争

①二つの戦争は何を目指したか？

プーチンは、ピョートル大帝の偉業・大ロシア帝国建設を賛美し、世界を二分した世界強国ソ連の崩壊、ロシアの小国化、ウクライナ、ベラルーシ（白ロシア）などの独立・多数国家成立を民主化・自由化ととらえるのではなく、大国ロシアの世界的地位・「領土」（支配権）などの喪失ととらえ、強烈な「敗北意識」を持っています。「敗北の克服」、大国ロシアの再建・世界的な覇権的地位の再獲得を追求する意識が強烈に見て取れます。

ヒトラー・ナチ党はまさに第一次世界大戦の「敗北」、その克服とロシアとその周辺の征服による東方大帝国建設が一貫した目標でした。

②いかなる領土・勢力圏の再獲得・再建・創造をめざしたか？

プーチンはチェチェン、ジョージアなどでの独立の志向と勢力を武力で抑え込み、ロシア（支配）地域の拡大を着々と目指し、絶大な権威を確立しました。その成功過程が彼の英雄化や神話化をもたらしました。その方向性はついにウクライナ領土・クリミアを武力を背景に併合し、さらにドネツク、ルガンスクを新露派勢力を支援して「独立」させて、併合する暴挙に出ました。今回のウクライナ侵略に成功しロシアとウクライナ、ベラルーシを統合した大国の形成に成功すれば、ピョートル大帝以来のロシアの英雄になれる、それを目指しているといえるでしょう。

ウクライナの人々の抵抗、ヨーロッパ諸国・アメリカのウクライナ支援により、プーチンの野望を打破できるかどうか、これが現在世界に問いかけられています。

ヒトラー・ナチ党は、第一次世界大戦で喪失した領土、世界的地位の回復、すなわち「敗北の克服」が一貫した中心的目標でした。それを段階的に――最初は「平和的に」、そしてついには武力で追求。最初は「民族自決」の論理を利用・活用しました。オーストリア併合、ズデーテン・ドイツ人地域の併合はまさに「民族自決」の論理を前面に出した。それが英仏等の宥和政策を引き出し、曲がりなりにも通用したのでした。

しかし約五か月後、国際的約束を破り、他民族地域チェコに進駐し、保護領にしました。さらに、一二三年ぶりに独立を果たしたポーランド共和国からその生存に不可欠な

「回廊」を取り返そうと企て、拒否されて、遂に三九年九月一日、侵略戦争の火蓋を切りました。帝国時代の国境線を取り戻すだけでなく、ソ連・スターリンと協力してポーランドの民族的国家的独立を全面的に破壊しました。ポーランドの支配層・エリートを殲滅し、ユダヤ人をゲットーに強制集中し、追放にとりかかりました。過渡的措置としてのゲットーへの集中では劣悪な生存条件でユダヤ人の餓死・病死が増えていきました。

ヒトラーは電撃戦で対独宣戦布告した英仏をはじめとする西ヨーロッパ諸国に対して火蓋を切り、占領支配下に置いた後、ついにソ連全土への総攻撃を始めました。短期電撃的な勝利をもくろんだバルバロッサ作戦は、ソ連に甚大な人的物的被害を与えながらも、祖国防衛に立ち上がったソ連民衆の抵抗の前に挫折し、長期戦となりました。スターリングラード攻防戦、その後のクルスク大戦車戦などでの大敗北、占領地域縮小で、遂にはソ連領土から追放されていきます。

ヒトラー・ナチスの軍隊と警察機構は、ソ連を支配するユダヤ・ボルシェヴィズムのせん滅を掲げ、抵抗・反撃するボルシェヴィズム、その担い手、共産主義の基盤・源泉と位置付けたユダヤ人・ユダヤ民族を殲滅していきます。反ユダヤ主義をイデオロギー的武器として世界強国ドイツ、東方大帝国ドイツ建設という基本目標を実現しようとし、その失敗の中で起きたことでした。

結び

ヒトラーは、生まれたときからヒトラーではありません。
どのような諸要因が、われわれの知るヒトラーをつくりだしたのでしょうか？
プーチンについても同様に彼の現在を創り出した諸要因を冷徹に見据える必要があるでしょう。
ヒトラーやプーチンを生みだした諸要因を見極め、それらをなくしていくこと、その意味で歴史を現代に生かすこと、現在の日本人がホロコーストの歴史から考えることではないでしょうか。その意味で、拙著は問題提起の本です。